

# 宇宙空間産業研

## 将来は道産「大樹」で活用へ

# 小型衛星搭載センサ試作

### 完成は01年より詳細にカラー識別

【札幌】NPO法人「宇宙空間産業研究会」(理事長・佐鳥新道工大准教授)は、小型衛星に搭載することを目的とした「ハイパスベクトルセンサ」の試作品を完成させた。実験を経て2011年度の完成を目指す。将来的には開発を進める道産衛星「大樹」に搭載、農業など幅広い分野での活用が期待されている。(末次一郎)

ハイパスベクトルセンサは、可視光線から赤外線までの複数の光スペクトルを撮影する仕組みで、通常のカラー画像では識別できない対象物の変化をとらえることができる。次世代型の画像センサ。

道内の企業や研究者らによる研究会では、すでにカメラの製品化に成功し、株式会社の北海道衛星が製造元となり、昨年は大手企業や大学などに10台を販売、問い合わせ

や温度の変化に対応するいく。開発費用は億円。実験などを経て、衛星を見込み、欧州宇宙機関に搭載できるよう改良しての13億円と比べる。は



小型衛星搭載用のハイパスベクトルセンサと佐鳥准教授

るかに低コストだ。センサは11年の完成予定で、実際の打ち上げにはさらに2、3年かかる見通し。大樹町を打ち上げるかに低コストだ。道産の技術を使った小型衛星により、地球観測の分野を中心とした、世界の宇宙産業の発展に貢献したい」と話している。